

石川啄木をスペイン語の世界へ

伊藤昌輝

一昨年末、『スペイン語で親しむ 石川啄木 一握の砂』を神戸の大盛堂書房から出版しました。「百人一首」の他にあまり歌を覚えていない人も、

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹（かに）とたはむる」

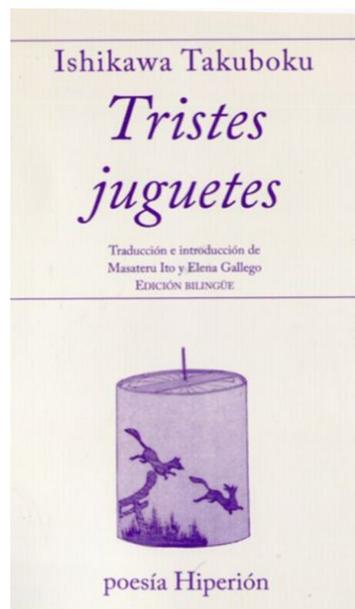
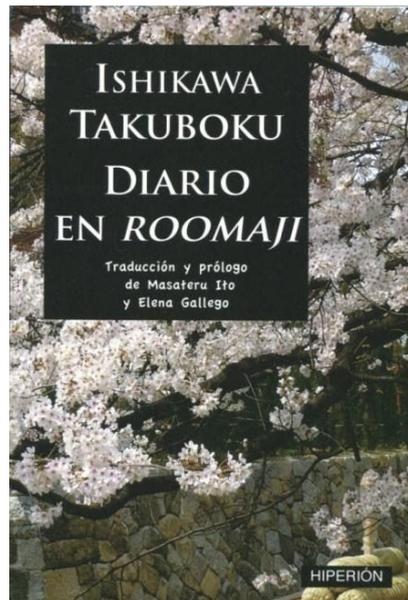
等、啄木の歌を誦んじる人は多いようです。啄木の歌は日本の伝統的なテーマ（四季の美、会いたい人に会えないわびしさ、時が早く経つことの嘆かわしさ等）に縛られない近代人独特の、全く奇抜な着想が溢れています。

「はたらけど はたらけど猶わが生活（くらし）楽にならざり
ぢっと手をみる」

啄木の歌は表現の美よりも啄木という人間自身が直接に読者の心を惹きつけます。



また、昨年末、スペインにおいて啄木の『ローマ字日記』（DIARIO EN ROOMAJI, Ediciones Hiperion）を出版しました。ドナルド・キーン氏は、啄木の日記も短歌に劣らない位すばらしく、20世紀の日本文学の中でユニークな地位を占めている、と述べています。日記の中の白眉は明治42年の『ローマ字日記』です。啄木が、この表記法を選んだのは、妻に読まれたくないという理由からだけでは恐らくなかったでしょう。彼はローマ字で小説を書こうとしたこともあり、また社会革命の必要性を述べた手紙の中で、ローマ字普及の実行運動を始めたい、と書いています。啄木は日本の文学者の中でも、日本語の改造を真剣に考えていた先覚者の1人だったと言えるでしょう。



さらに、今年の2月には同じスペインの出版社から『悲しき玩具』（Tristes Juguetes）のスペイン語訳も出版しました。「悲しき玩具」は「ローマ字日記」とまったく同じ時期に詠まれた歌集ですので、両方を併せて読むと、啄木への理解が一層深まるものと思います。

ドナルド・キーン氏は、「日本近代文学を通読すると、私は啄木が最初の現代人であったというような気がしてならない」とも述べています。

ちょうど今朝ドナルド・キーン氏が心不全のため96歳で亡くなられたとの訃報に接しました。日本文学の研究と海外への紹介に生涯をささげられた同氏のご冥福を心よりお祈りします。（了）